

令和8年度 学校評価計画書

石川県立金沢伏見高等学校

| 重点目標 | 具体的取組 | 主担当 | 現状 | 評価の観点 | 達成度判断基準 | 判定基準 | 備考 |
|---|---|-----------------------|--|--|---|------------------------------------|-----------------------|
| 1 生徒が自己実現に向け、失敗を恐れずに多様なことに取り組めるよう、教職員は安心・安全で温かみのある教育環境づくりに努める。 | ① 落ち着いた授業を受ける習慣の確立に向け、授業開始前には着席し準備が整っている学習環境づくりに向け、定期的にノーチャイムデーを設け、自ら時間を意識した行動をとれるよう指導する。 | 生徒支援課 保健相談課 各学年 | 時間を守る意識の高い生徒が増えている一方で、時間管理を教員からの呼びかけに依存している生徒も見られる。 | 【成果指標】(生徒) 生徒が時間を意識した行動をとることができる。 | (生徒)時間を意識した行動をとることができる生徒の割合が A: 90%以上 B: 80%以上90%未満 C: 70%以上80%未満 D: 70%未満 | C、Dの場合、指導方法を再検討する。 | 7月と12月に学校評価(生徒)で調査する。 |
| | ② 自発的に挨拶しようとする意識を高められるよう、生徒会や校風委員会を中心啓発活動を企画・運営し、爽やかなあいさつが校内外で交わされる学校環境をつくる。 | 生徒支援課 各学年 各部活動 | 多くの生徒が校内で挨拶を交わしているものの、自ら進んで挨拶しよう意識している生徒の割合は依然として目標に達していない。 | 【成果指標】(生徒) 生徒が自ら進んで挨拶ができる。 | (生徒)自ら進んで挨拶できる生徒の割合が A: 90%以上 B: 85%以上90%未満 C: 80%以上85%未満 D: 80%未満 | C、Dの場合、改善策を検討する。 | 7月と12月に学校評価(生徒)で調査する。 |
| | ③ いじめ防止に関する講話や教員対象の研修会などにより、生徒・教員ともにいじめに関する意識を高め、いじめの起こらない雰囲気をつくる。 | 生徒支援課 保健相談課 各学年 | 「いじめはどこでも起こり得るもの」という前提に立ち、実態の把握に努めるとともに、個々の事案に対して組織的かつ迅速に対応している。今後も、些細な変化も見逃さず情報を共有できる体制を継続していくことが必要である。 | 【努力指標】(教員) いじめを見逃さない学校づくりに組織的に取り組んでいる。 | (教員)本校の「いじめ防止基本方針」に基づいて、いじめやネットトラブルの未然防止に学校全体で組織的に取り組んでいると回答する教職員の割合が A: 100% B: 90%以上100%未満 C: 80%以上90%未満 D: 80%未満 | C、Dの場合、改善策を検討する。 | 7月と12月に学校評価(教員)で調査する。 |
| | ④ 美化委員、保健委員会を中心に学校生活の環境保全に関する啓発活動を自主的におこない、環境保全に対する生徒の意識を高められるようにする。 | 生徒支援課 保健相談課 各学年 | ゴミの分別については改善がみられるものの、引き続き清掃時間に美化委員の生徒が分別状況の確認を行う。また、消灯については、無人の教室で電気がついたままの状況が見受けられた。 | 【成果指標】(生徒) ゴミの分別、教室やトイレの消灯が正しくなされている。 | (生徒)ゴミの分別、教室やトイレの消灯、校内の環境保全活動に積極的に取り組んでいる生徒の割合が A: 95%以上 B: 90%以上95%未満 C: 80%以上90%未満 D: 80%未満 | C、Dの場合、改善策を検討する。 | 7月と12月に学校評価(生徒)で調査する。 |
| 2 生徒が学習意欲を高め主体的に学ぶ方法を見つけられるよう、教職員は様々なICT機器を活用した評価の研究を進め、その成果を指導方法の改善に生かす。 | ① 各授業において、ICT機器を効果的に活用した評価の研究を進めるとともに、評価方法の具体事例を教科間でも共有していく。 | 教務課 進路指導課 各教科 | 教職員は授業でプロジェクタ等のICT機器や生徒の個人端末を用いた授業を積極的に実践している。そのうえで、学習支援アプリ等を効果的に用いることにより、教員の負担軽減や業務改善を図る必要がある。 | 【努力指標】(教員) 教員は学習支援アプリ等を活用することで、生徒の復習のための問題作成の負担軽減や学習評価集計の効率化を図っている。 | (教員)学習支援アプリ等を活用することで、生徒の復習のための問題作成の負担軽減や学習評価集計の効率化を図っていると回答した教員の割合が A: 70%以上 B: 60%以上70%未満 C: 50%以上60%未満 D: 50%未満 | C、Dの場合、学習支援アプリの活用方法に関する研修体制を再検討する。 | 7月と12月に授業評価(教員)で調査する。 |
| | ② 学習時間調査や面談等を活かして、生徒が自分に必要な学習量や内容を理解した上で、見通しを持ち家庭学習に取り組む態度を育て、学習習慣の定着を図る。 | 教務課 各学年 各教科 | 家庭学習の状況については、担任が把握し、学習内容が偏っている生徒や学習時間が不足している生徒に対して、速やかに面談を行い、助言や支援を行っている。一方で、生徒は個々の学習到達目標や進路実現に向けた目標を掲げているものの、十分な計画性をもって学習に取り組むことができていないのが現状である。 | 【成果指標】(生徒) 生徒が自分で学習目標を設定し、それに向けて学習に取り組むことができる。 | (生徒)「自分で立てた学習目標に向けて学習に取り組むことができた」と回答した生徒の割合が A: 70%以上 B: 60%以上70%未満 C: 50%以上60%未満 D: 50%未満 | 学年別に評価し、C、Dの場合、学習指導のあり方を再検討する。 | 7月と12月に学校評価(生徒)で調査する。 |

| 重点目標 | 具体的取組 | 主担当 | 現状 | 評価の観点 | 達成度判断基準 | 判定基準 | 備考 |
|--|--|----------------------|--|--|--|--|---|
| 3 生徒が十分な情報をもとに、自ら考え、選択し、進路を決定できるよう、教職員はキャリア教育の充実に努める。 | ① ホーム担任による個別面談や進路希望調査・進路ガイダンス等を通して、生徒が将来を見据えた進路目標を設定できるようにする。 | 進路指導課 各学年 | 各生徒の進路に関する適性や能力について、客観的な資料を基に個別面談等を行うことで、生徒は将来の方向性を見出すことができている。学年が上がるごとに具体的な目標を設定できるよう、情報の共有を継続していく。 | 【成果指標】（生徒） 個人面談や進路ガイダンスにより、生徒が進路先を検討・比較する情報が提供できている。 | （生徒）担任等との個人面談や進路ガイダンスにより、進路先について自分で比較し選択するための情報を得ることができた生徒の割合が A：90%以上 B：80%以上90%未満 C：70%以上80%未満 D：70%未満 | C、Dの場合、面談内容や時期、および面談回数等、生徒への情報提供のあり方や意識づけ方法を再検討する。 | 7月と12月に学校評価（生徒）で調査する。 |
| | ② 生徒の進路志望決定に向けて、全教員で取り組む体制を整える。 | 進路指導課 教務課 各学年 | 伏見プラスや総合的な探究の時間等、生後が自身の進路について考える取組を行っている。 | 【成果指標】（生徒） 伏見プラスや総合的な探究の時間の取り組みが、自身の将来の生き方や進路について考えるきっかけになった。 | （生徒） 総合的な探究の時間をはじめ、伏見プラス等学校の取組が、自分の進路について考えるきっかけとなったとする生徒の割合が A：80%以上 B：70%以上80%未満 C：60%以上70%未満 D：60%未満 | C、Dの場合、取組内容や生徒への情報提供のあり方、意識づけ方法を検討する。 | 7月と12月に学校評価（生徒）で調査する。 |
| | ③ 生徒と保護者に対し、進路選択に役立つ説明会を適時適切に実施する。また、進路志望実現のために必要な学習環境を提供する。 | 進路指導課 各学年 | 生徒の進路志望を実現させるために、具体的な目標を提示し、生徒が意欲的に努力し続けるサポートをしている。 | 【成果指標】（生徒3年生） 生徒が志望する学部（学科・コース等）に合格することができる。 | （生徒3年のみ）（年度末進路結果） 志望する学部等に合格した生徒の割合が A：90%以上 B：80%以上90%未満 C：70%以上80%未満 D：70%未満 | （進路志望調査） | C、Dの場合、面談内容や時期、および面談回数等、生徒への情報提供のあり方や意識づけ方法を検討する。 |
| 4 教職員は、生徒が生徒会活動・部活動・学校内外の行事・体験活動とおして自己肯定感を高められるよう支援する。 | ① 部活動の魅力を発信するさまざまな機会を設け、部活動に加入している生徒だけでなく、全校生徒が部活動の良さを実感できる取組を行うことで、学校生活の活力につながる部活動づくりに努める。 | 生徒支援課 各学年 各部活動 | 部活動の加入率は低下傾向にあるものの、「部活動が学校生活を活力あるものになっている」と認識している生徒は多い。 | 【満足度指標】（生徒） 生徒が、部活動は学校生活を活力あるものになっていると考えている。 | （生徒）部活動が学校生活を活力あるものになっていると考えている生徒の割合が A：80%以上 B：75%以上80%未満 C：70%以上75%未満 D：70%未満 | C、Dの場合、各部活動の活動時間や内容等を検討する。 | 7月と12月に学校評価（生徒）で調査する。 |
| | ② ボランティア活動後の振り返りを充実させ、自己の成長を実感させることで、ボランティア活動に積極的に参加する意識を一層高める。 | 生徒支援課 各学年 各部活動 | 伏見川清掃への参加や地元町会との雪かきボランティア協定の締結など、地域から信頼される学校づくりの一環としてボランティア活動への参加を促すと同時に、これらの活動を通して、生徒の自己有用感や自己肯定感の向上を図っている。 | 【成果指標】（生徒） 生徒が、ボランティア活動は学校生活の充実や自己の成長につながると考えている。 | （生徒）ボランティア活動が学校生活の充実や自己の成長につながると回答する生徒が参加生徒の割合が A：80%以上 B：75%以上80%未満 C：70%以上75%未満 D：70%未満 | C、Dの場合、活動計画の周知を徹底するとともに、活動の意義を実感させる取組を再検討する。 | 7月と12月に学校評価（生徒）で調査する。 |
| 5 教職員が組織的かつ協働的に業務に取り組むことにより、教育活動全般の効果と効率を高める。 | ① 効率的、効果的な業務遂行に向け、ICTを積極的に活用して情報共有を図る。また業務の役割分担を明確にして業務を平準化し、課・学年を越えて協力し合うことを教職員一人ひとりが心がけ、組織として丸となって取り組む。 | 教頭 各課・学年主任 | ICTを活用して情報を共有することにより、多くの教職員が様々な場面で協力しあえる職場環境となっている。一方で、積極的な情報収集が習慣化されていない教職員もわずかにいるのが現状である。効率的に業務を遂行するため、情報共有を進め、教員一人ひとりが全体を把握しアイデアや力を出し合うことで、より効果的な業務改善と教育活動の充実に努める必要がある。 | 【努力指標】（教員） 教員は効果的な業務遂行に向け、組織的、協働的に取り組むよう努めている。 | （教員）組織的、協働的に取り組むよう努めている、概ね努めていると回答する教員の割合が A：80%以上 B：70%以上80%未満 C：60%以上70%未満 D：60%未満 | C、Dの場合、次年度の取組を再検討する。 | 7月と12月に学校評価（教員）で調査する。 |
| 6 教職員は、担当する教育活動の成果等について、学校のHPや印刷物等を活用して、保護者や地域に対し迅速かつ分かりやすく発信する。 | ① 本校HPについて、より閲覧しやすくなるよう工夫を行い、保護者や地域、中学生等に対する情報提供の一層の充実を図る。また、緊急時には、一斉配信メールに加え、教育プラットフォーム及び学校HPを活用し、複数の手段による迅速かつ確実な情報発信を行う。 | 副校長 各課・学年主任 | ホームページや配信メールに加え、昨年度より導入した教育プラットフォームを活用し、情報をきめ細かく適時適切に提供している。一方で、提供する情報の妥当性について保護者等と共有しながら検討していく必要がある。 | 【満足度指標】（保護者） 保護者が本校の教育活動全般を理解し、満足している。 | （保護者）本校の教育活動についてホームページや配信メール等で提供される情報に「大いに満足している」、「満足している」と回答する保護者の割合が A 90%以上 B 85%以上90%未満 C 80%以上85%未満 D 80%未満 | C、Dの場合、提供する情報の内容やタイミング等について再検討する。 | 4月から7月と、8月から12月の集計で評価する。 |